

## 205) Play Back

ここに座ってあなたとふたり      なにも言わずにガラスに映る  
春の姿を見つめた日から      もうどのぐらい過ぎたでしょうか  
    あの日のころは夢はみな      叶うような気がしてた  
    はじけるような毎日を      鮮やかに生きていた

春の吐息が花びら散らす      大地をすべて薄紅色に  
染めてゆくのがとても奇麗で      すぎゆく春は幸せでした  
    薄紅色の思い出が      色褪せてゆくなんて  
    まだ若かったわたしには      予感さえしなかった

あの日と同じ席に座って      薄紅色の花は舞い散る  
と<sup>とき</sup>歳月の流れは逆回りして      記憶の川を<sup>さかのぼ</sup>遡<sup>り</sup>ってく  
    もう帰らない青春の      思い出を<sup>て</sup>掌<sup>て</sup>にとって  
    無駄使<sup>り</sup>いたあの<sup>と</sup>時間<sup>を</sup>を      ただひとり懐かしむ

昨夜見ていたビデオのように      青春の日を巻き戻せたら  
あなたの胸で夢を見ていた      あの日の頃にすぐ帰りたい  
    若かった日の輝きを      いつの日か置き忘れ  
    何事もなかったように      青春と別れたの